

動物への真つすべない思い

松本さんは、高校生のとき、野生動物の交通事故を目にしたことで、野生動物を救い、痛ましい事故を減らすにはどうすれば良いかを考え始めたそうです。

「野生動物に対して自分ができることは、診療や治療をすること。そして、野生動物の生態などを多くの人に伝え、交通事故や生息地の減少など、野生動物と人との付き合い方を考えるきっかけ作りだと思いました」と獣医師を目指した理由を語る松本さん。その志のもと、日々、動物の治療や診療にあたっています。



▲獣医師の視点を取り入れ、クマの説明を行う松本さん

「傷口を縫合したとき、クマがその縫合を剥がしてしまうことがあります。試行錯誤の末、縫合方法を工夫し、無事に傷口を治療することができたとき、獣医師としてスキルアップできた喜びを感じ、そして何より、クマが元気になった姿を見てホッとしました」と話すその表情は、クマへの愛情

に満ちています。

その巨体から、触ることもままならず、診断や治療にも多くの工夫が必要なエゾヒグマ。

現在、松本さんは、同施設で初の試みとなる『エゾヒグマでの安全な採血方法の確立』に向けて取り組みを進めています。

「採血のとき、安全のため全身麻酔をかけると、クマの体に負担が大きくリスクを伴います。そこで、蜂蜜を使い、そちらに気を取られている間に、格子の間隙から出た指で採血する方法を試しています。人に危険が少なく、クマにとっても負担が少ないこの方法の確立を目指しています」。

動物たちの元気のために

「獣医療は個人プレーでは成り立ちません。動物の体の異常をいち早く発見するためには、飼育員と互いにコミュニケーションをとり、自分が見ていない所での動物たちの様子を知ることが必要です。元気な姿を皆さんに見せることができるよう、動物たちの体調管理を行っていききたいですね」。

来園者に元氣と笑顔を与える動物たちとともに、今日も動物と向き合う松本さんの姿があります。

きらり

KIRARI

まつ もと なお や

松本直也さん(登別東町)

登別温泉街からロープウエーで約7分の標高550mに位置する『のぼりべつクマ牧場』は、北海道に生息している野生動物の保護や観察、研究のために昭和33年に開園。現在は83頭のエゾヒグマのほか、エゾリスやエゾタヌキなども飼育しています。

これらの動物の元気を支えているのは、クマなどの飼育や診療、治療などにあたる松本直也さん。

今回は、同施設をはじめ、登別マリンパークニクスやサホロリゾート・ベアマウンテンで、唯一の獣医師としてクマなどの動物に向き合う松本さんの思いや今後の目標について伺いました。

野生動物の素晴らしさを伝えていける獣医師でありたい。



昭和63年鳥取県生まれ。27歳。

帯広畜産大学を卒業後、平成24年に加森観光株式会社に入社。現在、同社のグループ施設である『のぼりべつクマ牧場』で獣医師として活躍。若手職員の中心となり『のぼりべつクマ牧場』を盛り上げている。